



全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol. 28 (Oct. 2016)



第11回全国草原サミット・シンポジウムの現地見学会で訪れた上山高原
(兵庫県美方郡新温泉町)

第11回全国草原サミット・シンポジウムが開催されました

2016年10月15日から16日、兵庫県美方郡新温泉町で、「第11回全国草原サミット・シンポジウム in 上山高原」が開催されました。延べ500人近くの参

加者があり、各地での取り組みの報告、今後の草原保全へ向けての議論が行われました。参加された方からの報告をお伝えします。

上山高原を歩いて～草原サミットエクスカージョン参加報告～ (増井大樹：滋賀県在住)

2016年10月15日に草原サミットのエクスカージョンが行われました。この上山高原はかつて広大な草原があったのですが、数haまで減少してしまった場所です。平成13年より草原再生を行った結果、現在では34haもの草原を見ることができます。私が上山高原に到着すると約150名の参加者が秋晴れの空のもと、青空教室といった趣で地元の方が上山高原の解説をしていました。話をしていたのは上山高原の近くに子供の時から住む小畑さん(NPO法人上山高原エコミュージアム)という方で、お話の中で出た「上山高原は灰色の世界だと思った」という言葉と「山火事というものが分からなかった」という言葉が印象に残りました。

「上山高原は灰色の世界だと思った」というのは、小学3年生の時に小畑さんがはじめて上山高原に来た時の印象だそうです。小学校の遠足(上山登山)で5月に上山高原に来たそうですが、まだ山焼きから時間がたっておらず、ワラビくらいしか生えてなかったのが灰色の世界に見えたとのことでした。みんなでワラビ採りをして、それをお土産に家に帰るのが楽しい思い出になったと話してくれました。

「山火事というものが分からなかった」というのは、昔の上山高原の山焼きを端的に表した言葉で、かつての上山高原では5月の初めに山焼きをしており、草原の周囲のブナ林には残雪があり、そのブナの木の下で山焼きの火が勝手に止まっていたそうで



す。また、麓の用水路の管理のために火をつけ、それが延焼して草原一帯が燃えることもあり、長いときは3日間くらい燃えることもあったとのことでした。それでも山火事ではなく、草原が燃えているだけという認識だったのでしょう。草原と火がすごく身近にあり、火が怖いものでなかったため「山火事というものが分からなかった」のではないかと感じました。

また、上山高原の麓に住む小畑さんの友人(植村さん)からのお手紙も紹介され、「秋の農繁期は特に楽しかった。我々子供は上山に牛の放牧に行くのが日課でした。中には隠居のお爺さんもいた。色々な話をしてくれた。浪花節の好きなお爺さんもいた。雪山で兎を捕るのに(バエ投げ)木切れを投げる。鷹の羽音と間違えた兎は雪の中に潜る。そこを捕まえるといった話。そのお爺さんが実際に2羽の兎を背負っているのを見たことがあります。村の牛のほとんどが放牧されていた。牛を飼っていない家の子供もよその家の牛の面倒を見て小遣い稼ぎをした。牛を山に送り込むと先輩の指図で草や木を集め雨しのぎの小屋を作った」というかつて人で賑わっていた草原の姿が思い出されるようなお話の紹介がありました。小畑さんの話を草原で聞いているうちに、きっと上山高原の草原の再生は、ただ単に草原を再生しているというよりも、子供の時に楽しく草原で過ごした思い出を再生しているのではないかとそん



な思いが頭をよぎりました。

話の後の草原の散策では、山頂から眺める雄大な景色に多くの人が満足しているようでした。ススキの穂がたなびき、眼下には山々が連なり、その奥には日本海の水平線が見える光景は上山高原ならではの

の光景で、多くの人がその光景をカメラに収めていました。このサミットのエクスカッションを契機に昔のような日常の傍に草原がある暮らしが少しずつ上山高原に戻ればと期待しつつ、草原をあとにしました。

シンポジウム基調講演の報告 (笹岡達男：東京都在住／ネットワーク理事)

今回の基調講演は、「草原の再生と生物多様性」というテーマで、武田義明先生（放送大学兵庫学習センター客員教授・神戸大学名誉教授）にお話いただきました。

武田先生は、地元兵庫県ご出身で、神戸大学を中心に長年研究活動を続けられ、特に 2002 年からは今回開催地の上山高原で、群落と環境の関係や群落の時系列的変化などを研究されています。

全体構成は、①世界の植生類型、②草原の種類、③草原面積の変遷など、総論的な内容に引き続き、④近畿地方南部の草原、⑤東お多福山草原再生、⑥上山高原草原再生と、草原についてグローバルな視点からのお話から、具体的なフィールドの話題まで、幅広い内容を興味深く聞くことができました。

【総論】

世界の植生類型は年平均気温と年平均降水量との関係により概ね区分されますが、その中で日本の草原は、自然草原、半自然草原（二次草原）、人工草原に分けることができます。とりわけ採草・放牧・その他の目的で人間が利用することにより形成されてきた二次草原生態系が、国土に幅広く分布していましたが、農業形態や生活の変化によりこうした利用が急減し、日本の草原面積は大きく減少しました。これに伴い、個々の草原の縮小や孤立化により出現種数の減少や特定種の絶滅リスクが高まることなどについて、事例を挙げながらわかりやすく説明していただきました。

【近畿地方南部の草原面積と種多様性】

京阪神から紀伊半島にかけての近畿地方南部には、神戸市のシンボルでもある市章山、錨山といった極めて小規模だが確実に管理されている草原から、研究や観光の面でも著名な生石高原（和歌山県）、曾爾高原（奈良県）のように比較的まとまった面積の草原まで様々な草原を見ることができます。これらの草原における種数面積関係等の研究成果をご紹介いただきました。特に、市街地のど真ん中であって（普通の人には）草原とは認識されないであろう、市章



山・錨山においてもそれなりの草原性種数がカウントされているのは驚きでした。

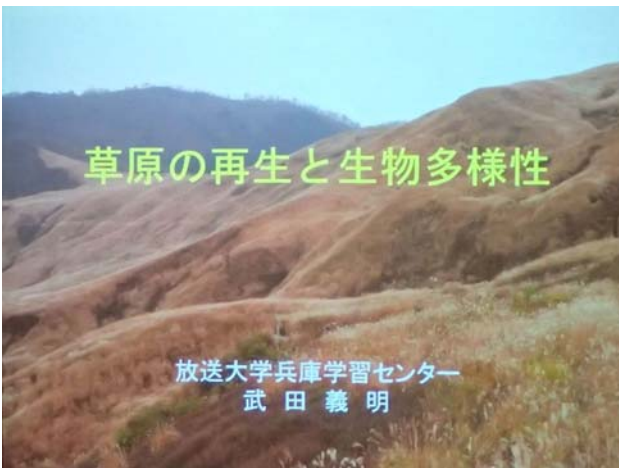
【東お多福山草原再生】

東お多福山は、六甲山地東部の神戸市東灘区と芦屋市との境にある標高 697m の山です。山頂部を中心にススキやネザサの草原が広がり、古くから市民のハイキングやピクニックの場として親しまれてきました。しかし 1970 年代以降、主として刈り取り管理が行われなくなったことにより、全体として草丈が高く、樹木の侵入が進んだ姿となりました。草原面積も 1948 年から 2007 年までのおよそ 60 年間で、82.9ha から 9.2ha へと 9 割近く減っています（主要因はゴルフ場開発、植林、植生遷移による森林化）。

これに対し、2008 年から刈り取り作業を再開するとともに、2011 年には多くのセクターが参画する「東お多福山保全・再生研究会」が発足し、年数回の刈り取り作業や、植生モニタリングを行い、草原の再生に向けた取り組みが続けられるようになりました。人力による刈り取りエリアは合計約 9,000 m² ですが、作業が大変なこともあり、エリアによって管理手法を変えるなど、試行錯誤が続けられているとのこと。

【上山高原草原再生】

上山高原は、兵庫県北西部、鳥取県境に近い標高およそ 940m 余りのエリアで、一帯は扇ノ山（標高 1310m）を中心とする火山地帯からなっています。



かつての採草放牧地が、様々な開発計画にさらされながらも結果的に保全（放置）され、2000年前後には、かなり森林化が進んだ状況にあったそうです。

2001年には、この地域を、イヌワシを初めとする希少かつ多様な自然の保全・再生を目指し、ススキ草原及びブナ林の再生を図る「上山高原エコミュージアム基本計画」が策定されました。以来、ササや灌木の刈り取り、スギ人工林の樹種転換などを中心とする自然再生の取り組みが始まるとともに、2010年には自然再生推進法に基づく自然再生協議会が設立され、地元関係団体、専門家、行政機関等多くのセクターからなる推進体制が整備されています。

これまでの取り組みで再生されたススキ草原は約35ha。これは、自然再生事業実施計画対象地域393haの1割弱、上山高原エコミュージアムの圏域3,550haの約1%にあたります。このススキ草原区域の維持管理手法としては、火入れ、牛放牧、手刈りと、それらの組み合わせによる作業区分を設けてエリア別に実証実験が続けられてきました。11箇所のモニタリング・ポイント毎に出現種数及び草原指数（全出現種の被度に対する草原種の被度の割合）の時系列変化が示されています。草原性の注目植物もかなり出現しているとのことでした。

今後の課題として、①手刈りだけでは出現種数、草原指数とも限界が見えてきていること、②刈り取った植物の利用方法がなく持ち出しができていないこと、③牛放牧にはローテーションが必要だが作業者の高齢化に伴い困難があること、④保安林指定等のため火入れ作業ができないエリアがあることなど、どこの現場でも少なからず共感を覚えるような悩みがあることをお聞きすることができました。

最後に、都市域周辺の畦畔、都市内の遊休地、河川堤防、古くからのゴルフ場などの小規模草原においても、固有種が残っていたり、生態系ネットワーク形成上重要な場所であったりするなど、その存在意義を考慮すべき点があることを指摘されました。

【所感】

草原を巡るグローバルな、あるいは日本全国の視点からのお話と、具体的に草原再生活動が行われているフィールドのお話しが相まって、大変わかりやすく、瞬く間に時間が経過する講演でした。いずれのフィールドも、多くの方々の努力により作業が行われ、同時に専門家によるモニタリングデータが蓄積されていることから、今後とも作業の進捗に伴う草原生態系の推移や変化が追跡できることが期待されます。

なお、シンポジウム後の交流会において、東お多福山草原の移り変わりについて、新旧の写真を多数集めて編集・解説された冊子が著者の橋本佳延先生から紹介されました。この中には、武田義明先生提供の写真も多数収録されていますが、必ずしも専門家ではない方々が行楽の際に写した写真も数多く収録されており、こうした情報を集めていくことにより、景観や生態系の推移を過去に遡って一望することが出来る大変貴重な資料となることを実感することができました。

実践報告に参加して

（太田陽子：山口県在住）

基調講演の後は3つの実践報告がありました。

はじめに、地元の上山高原エコミュージアム代表理事の小畑和之氏が、上山高原の歴史と人との関わりや現在の保全活動について報告されました。上山高原の草原はかつて放牧や茅刈りで盛んに利用され、生活の糧を得る場でしたが、農業様式の変化により放置されました。一時は草原の面積もかなり縮小していましたが、平成13年から自然再生事業が始ま

り、現在はボランティアの手によって37haの草原が維持されているそうです。しかし、今後は人材、費用の確保とともに、草原を守るための新たな仕組みづくりが必要だということでした。

次は、広島県北広島町の芸北中学校の生徒さん7名からの報告でした。小学校で学んだ「せどやま再生事業」を参考に、茅を利用して地域経済を回しながら草原を守る仕組み「茅プロジェクト」を作った



そうです。茅を買い入れる「茅金市場（かやきんいちば）」を運営し、地域の人たちから茅を集めることで、それぞれの地域で茅の草原が守られていきます。生徒さんも茅を刈って市場で売り、そのお金を修学旅行のお小遣いにしたり、今回のサミット参加の夕食代に充てたりしたそうです。試行錯誤はまだ続くようですが、茅を集めるための情報発信に努める姿や、地元経済の一旦を担うことを自覚した堂々たる発表に、参加者からは「すばらしい」「こちらの地域でもやってほしい」などという声が上がっていました。

最後は、佐賀大学農学部の染谷孝教授による野草

堆肥の中の微生物に関する報告でした。阿蘇の野草堆肥を調べると「善玉菌」が大量に見つかったということでした。これらは腐植物質を作るため保肥力増強の効果があつたり、抗生物質を作つたり、病原菌の繁殖を抑える拮抗菌を作つたりするそうです。実際に野草堆肥を施肥したハウスでは土壌中の微生物が非常に多くなっていることも確認されました。萱葺きの古茅などにも善玉菌が確認されるということでした。野草堆肥という伝統的な利用は理に叶つたものであり、野草を核とした農業は草原の保全、水質の保全、さらには特産物づくりの推進にもなるということでした。



第1分科会の報告

(国安俊夫：東京都在住)

第1分科会では約50名の参加を得て、「ジオパーク活動と草原」というテーマで、新温泉町ジオパークネットワーク代表の岡部良一様のコーディネートのもと、3件の報告と参加者を交えた討論が行われました。

まず、新温泉町山陰海岸ジオパーク館長の谷本勇氏から、地域を保全しながら元気にするためにジオパーク指定に取り組んだこと、山陰海岸ジオパークの特色と上山高原の成因、土壌・地形・生物相・暮らしの特徴について説明があり、上山高原の価値を認識した上で地域振興や教育に活用してゆくべきであるとの提案がありました。引き続き上山高原エコミュージアム調査研究会長の山本一幸氏から、県下でも一番多様性に富み希少な動植物の生息地でもある自然環境と、そこに住む人と文化、歴史に直接触れ合い総合的に学ぶ地域学習の取り組みの現状について説明があり、環境学習の場としての活用と、次世代を担う後継者の育成が課題であるが、自然学習への取り組みが少ない事が問題との指摘がありました。最後に兵庫県立人と自然の博物館研究員の布

野隆之氏から、絶滅危惧種で本来草原性のイヌワシが森林の多いこの地域に生息できたのは、日本海の存在による冬の雪原形成と、薪炭林やススキ草地の刈り払いなどの里山の手入れによる開放地の形成であること、イヌワシを支えてきた昔の暮らしが衰退してきているので、これからは教育が大切だとの話題提供がありました。

これを受けた質疑では、イヌワシに多くの関心があつまり活発な意見交換が行われました。イヌワシ



を見る観光に期待している、イヌワシを守る拠点施設の整備が必要ではないか、増加している鹿の駆除を通じイヌワシの餌を増やせば草原の広さはそれほど必要でなくなるのではとの意見に対して、布野氏からは、餌をあげるのではなくススキ草地の管理により餌場を作るのが重要、自然の状態でない飼育ではなく、地域が賑わった結果イヌワシが生息できることが大切とのコメントがありました。なお、会場より鹿駆除に伴う鉛中毒の発生について指摘や鹿の増加による植生被害対応が遅れているとの指摘もあ

りました。また、過疎化・高齢化によりススキの刈り取りが大変なので行政の支援も必要との意見に対して、芸北中学校でのカヤを茅葺職人に売っている事例報告もあり、頭を切り替える必要があるのではとの意見も出ました。最後に行政との関係について議論があり、行政任せでは何もできない、地域住民は故郷の宝を認識し問題意識を持ちながら行政に支援を求めてゆく形にすべきと座長がまとめ終わりとなりました。

第4分科会の報告

(佐久間智子：広島県在住)

第4分科会は「茅葺き文化の継承のための茅場の保全・再生」というテーマで議論されました。コーディネーターは兵庫県立人と自然の博物館の橋本さんと茅葺職人の塩澤さん、講演者は、茅葺職人の相良さん、三木さん、茅刈業者の長田さん、神戸市教育委員会文化財課の橋詰さんです。本分科会では、「茅の安定的な供給」と「茅の保全活動と茅葺文化との連携」という2つの議題に対し、コーディネーターからの質問に4人の講演者が答える形で議論が進められました。

はじめに、茅葺職人の塩澤さんから、茅葺を取り巻く現状についてお話しがありました。茅葺を取り巻く現状は、「茅がない」「職人がいない」「茅の値段が高い」の3つです。昔は茅がたくさんあり、牛馬の餌や田畑の肥料、屋根の材料や壁の材料として茅が利用されていました。しかし、生活様式の変化とともに、茅葺屋根にはトタンがかぶせられ、農業とともにあった茅葺文化はなくなりました。茅葺民家がなくなるスピードよりも早く茅葺職人はいなくなったそうです。

茅葺職人さんの仕事には大きく2つのタイプがあり、文化財として指定されている神社やお宮などの屋根を葺く仕事と、民家の屋根を葺く仕事があるそうです。前者は公共事業であるため、予算や仕事の進め方も大掛かりになります。一方、後者は家主さんと職人さんのあいだで調整しながら、予算に合わせて材料や葺き方などを変えることができます。相良さんのお話では、村で茅葺屋根が守られている理由として、地元の茅を使っていること、屋根の葺き方や材料を考えて予算を抑えていること、昔からの人間関係により、屋根のメンテナンスに責任を持つことができることがあげられるそうです。



それぞれの地域において、茅葺屋根の葺き方は異なり、材料もススキ、ヨシ、小麦ワラと異なるそうです。雪が多く降る丹後半島では、初冬に降る重い雪で根元の茎が折れてしまうススキよりも、雪に強いチシマザサを屋根の材料として利用していたそうです。現在の茅の供給地は大きく御殿場と阿蘇の2箇所です。ここでの茅は品質がよいことで知られていますが、供給地が2箇所しかないということで全国的に茅不足となることもあるそうです。御殿場で茅刈りをされている長田さんから、茅刈りの仕事について説明がありました。茅刈りの仕事は冬の短期間しかできないため、人を雇うためには、高い単価を支払う必要があるそうです。現在、茅刈りをされている方の平均年齢は60歳くらいだそうです。茅刈りは、手刈りであるため、刈る量が限られており、面積の広い御殿場では、全体の2%程度しか刈ることができないそうです。

神戸市で文化財を担当されている橋詰さんからは、茅葺文化を維持していくためにどのような工夫をされているのかというお話を聞きました。茅葺の方法は地域によって異なり、葺き方についてのデータはほとんど残っていないそうです。橋詰さんは、屋

根を葺く現場に出かけ、職人さんに聞きながら、どんな作業をしているのか記録しているそうです。茅を葺き替えるときには過去の履歴も分かるため、過去に遡ってデータを蓄積しているそうです。このようなデータは、文化財担当者が財務や経理の担当者に屋根を葺くためにどのような作業をしているのか、なぜその予算が必要なのかを説明するための裏付けとなるそうです。橋詰さんは、それぞれの茅葺民家に対し、いつどのような修理を行ったかも記録されていました。こうすることで、いつどのくらいの予算が必要なのか計画することも可能となり、文化財担当者が変わるときに引き継ぎをすることもできます。地域の茅葺文化を明らかにすることで、地元産の茅を利用することへつながるといってお話はとても印象的でした。

会場からは、茅葺民家に住むためには昔の生活スタイルにしなければいけないのか、茅葺職人さんは地元の人とどのように関わっていただけなのかという質問がありました。茅葺民家でも現代の生活スタイルで生活することができるそうです。ただし、昔と生活スタイルが異なるため、屋根のメンテナンス方法が変わる可能性があるそうです。また、茅葺職人さんが、地元の人と一緒に屋根を葺くことや、ワークショップなどを開催して、茅葺の技術を伝えることもできるそうです。

これまでの話を振り返り、議題である「茅の安定

的な供給」と「茅の保全活動と茅葺文化との連携」についてまとめがありました。「茅の安定的な供給」については、茅葺民家周辺の茅場を利用することが理想的です。地元で茅場ができれば、二大供給地である御殿場や阿蘇は不要というわけではなく、安定した供給地があることで、地元の茅場の利用を考えることが可能になります。茅の安定的な供給には刈り手さんの雇用も重要です。御殿場では、茅刈り以外にも、防火帯刈りやゴルフ場の芝刈りの仕事もあり、年間を通じて仕事ができる工夫をされているそうです。また、最近では、お茶農家さんが冬の時期だけ茅刈りの仕事をされたりするそうです。「茅の保全活動と茅葺文化との連携」については、草原の保全活動を行う人にとって、その場所の茅が屋根の材料として利用されれば、保全活動に対するモチベーションを維持することができるのではというお話がありました。茅葺職人さんも、草原に生きる動植物の生態を知ることで仕事のモチベーションが上がるそうです。茅葺職人さんからは「ススキ買いますよ」、「茅刈りのレクチャーも行いますよ」とメッセージをいただきました。

第4分科会では茅葺に関わる興味深いお話をたくさん聞くことができました。茅場はいろいろな立場の人がそれぞれの目的を持って集まり、つながる場であることを改めて感じました。

全体会の参加報告

(堤 道生：島根県在住)

分科会終了後、全国草原再生ネットワークの高橋会長コーディネートの下、全体会が開催されました。

はじめに、各分科会のコーディネーターからの報告がありました。次に、高橋会長が全分科会の成果について教育・経済・農業をキーワードとしたまとめを行いました。これを基に各分科会コーディネーターをパネリストとする討論が行われました。「教育」では、野草の価値が知られていないことが指摘され、より広く価値を知ってもらうための方策についてパネリストに意見を求めました。内藤氏からは小学生の土曜授業を利用した啓蒙活動の提案がありました。一方、岡部氏からは成人に対する広報の重要性が指摘され、ツアーガイドの利用が提案されました。「経済」では、上山高原にあるススキの茅葺き用屋根材としての利用可能性を例に、さまざまな活動の連携の重要性が指摘されました。橋本氏からは、

上山高原のススキは屋根材として優良であるものの供給網の確立が不可欠であること、またそれには小規模から始めることが重要との意見がありました。「農業」では、野草の価値を若い農業従事者に広く理解してもらうための方策について意見を求めました。三浦氏からは、科学的データを基にした積極的



な広報の重要性が指摘されました。

この後、会場からの意見も交え、野草の伝統的な利用法の伝承および新たな価値の創出について議論がありました。また、行政への要望についてパネリストに意見を求めたところ、害獣駆除（岡部氏）、草原保全・利用に向けた人的資源（内藤氏）、野草を使

った製品のブランド化（三浦氏）、茅葺き文化の保存（橋本氏）などにまつわる支援が挙げられました。

最後に、分科会の成果が盛り込まれた上山高原宣言「草原の保全と利用を続けるために」が提案され、会場の拍手をもって採択されました。

草原サミットの参加報告

（西村大志：東京都在住）

第11回全国草原サミットでは、6県11市町村の首長等が参加し、活発な意見交換が行われました。まず熊本地震からの復興等大変な中ご参加いただいた熊本県産山村村長から、一昨年に阿蘇で行われた前回全国草原再生サミットの報告が行われ、つづいて、全国草原ネットワークの高橋会長から昨日のシンポジウムの報告と問題提起がなされました。その後、各自治体から、各自治体の社会状況、草原の特徴や利用状況、草原に関する施策と課題について意見交換がなされました。各首長等のお話からは、各地域の草原について、劣化してきた状況こそある程度共通しているとはいえ、規模、周辺環境、課題など様々であること、その保全に対する取り組みの実施状況も様々であることが伺えました。私としては、全国草原サミット・シンポジウムへの参加が初めてということもあり、このように自治体を引っ張る立場の方から草原の話聞くのはほぼ初めてでしたが、自治体の代表としての言葉に交えて自身の草原への関わりや草原保全に向けた意気込みを語っておられるのを聞くと、今後の草原再生・保全の取り組みに期待が持てました。

そして、各自治体での草原保全活動の現状と課題について議論を深め、活動の連携と交流を図り、広く国民に草原の魅力と公益的役割を発信していくために、「全国草原自治体ネットワーク」の設立が発表されました。草原についての課題も取組状況も様々な各自治体が、連携し学びあいながら草原保全を進めていくのは素晴らしいことと思います。あとは、この輪を広げ、より実効性のあるものとしていくために、今後どれだけ活動していけるかが大事になってくると感じました。

最後に、今回の草原サミットの成果として、上山高原宣言が出されました。この中には、全国草原自治体ネットワークの設立のほか、草原の価値を見つめ直し自然環境の保全や草原再生に向けた取り組みを支援すること、草原の有する自然資源を教育、文化、観光、産業振興等に利活用できる社会環境を整備すること、草原の大切さや公益的価値を広くアピールするために「全国草原100選」を選定していくことが盛り込まれました。個人的には、全国草原100選で自分のまだ知らない草原や、草原の新たな魅力に出会えることを楽しみにしています。



各地からの報告

神戸における茅刈りという営みの再生

(塩澤 実：京都府在住)

神戸市では、町に点在する法面（のりめん：人工的な斜面）で茅刈りをするという、全国的にみてもユニークな活動が行われています。今回、当ネットワークの相互会員である茅葺き文化協会理事で、この取り組みに深くかかわられている茅葺屋の塩澤さんに、その経緯や意義を伺いました。今年も、神戸市では11月を茅葺き屋根とふれあう月間とし、様々な活動やイベントを企画されていますので、ぜひご参加ください！（草原再生ネットワーク：横田潤一郎）

—

この活動は1993年に始まり、すでに20年以上が経過しています。1991年に実施された「茅葺き民家・集落調査」（神戸市）で、この調査に関わった神戸芸術工科大学の学生と神戸市職員の有志で構成される「神戸エコアップ研究会」がその主体です。当時から、すでに茅の供給については課題となっていました。しかし、「茅が無いといってもススキだろう。大学

のまわりにもたくさん生えている、刈れば良いではないか（神戸芸工大：齊木先生）」の言葉がきっかけでした。

事前に神戸芸工大齊木研究室メンバーが神戸市北区の農家さんに赴き茅刈りを指南頂いた上で、神戸市須磨区の落合団地内の法面で、土地管理者の都市公団（現 UR）の許可を得て、この活動が始まりました。ただ、残念なことに収穫した大半はセイタカアワダチソウであり、ススキを選別して茅葺きの現場（大歳山遺跡公園）に持ち込んでも喜ばれない程度の品質でした。

以降、震災による1995年の中断を挟んで毎年一度のイベント「カヤテックコミュニティ」として活動は続きます。このころ、収穫した茅は齊木研究室で管理していましたが、安定した保管場所が確保出来ず、茅が駄目になることもありました。一方で、同じ場所で茅刈りを続けると2年目以降、目に見えてセイタカアワダチソウが減りススキが増えました。



ススキとセイタカアワダチソウ

1998年頃より学生の卒業に伴い参加者が減ったため、齊木研卒業生で茅葺き職人修行中だった私が、冬季1ヶ月休職して作業を受け継ぎました。この頃にはセイタカアワダチソウからススキとチガヤが多い草原に変化し、茅の品質も向上しました。

活動を続けるといろいろな気づきがありますが、このころ毎年茅刈りを始めると同時にモズがやって来て採餌することを知りました。また、茅場の厄介者だったクズを、茅を束ねる為に本格的に利用すると、クズの繁茂が抑制され且つ束ねるのに適したクズが



都市の法面で行われる茅刈り



茅葺き職人により使われます

生えることから、秋の七草に葛が含まれている理由に気がきました。茅刈り最初期のメンバーが茅刈りを学んだ農家さんは、クズを使っていたことも判明しています。

当初、茅刈りの活動は、都市から農村に材料を供給することで「双方向での都市農村交流」を目指すことを、その主旨としていました。このころから、こういった茅場での気づきを踏まえて、「茅葺き屋根保存の為の材料確保」に加えて「都市景観の創造」「2次自然の生態系の再生」を強く意識するようになります。

2000年代に入ると神戸市内各所で「茅葺き小屋づくりイベント」が開催され、材料に団地産の茅も使われるようになりました。このころ、芸工大敷地内に復元した「鴨長明の方丈」にゼミ活動としての茅葺きに参加した学生の中から、茅刈りに参加する中心的なメンバーが生まれ、これが茅葺き屋の原型となっています。

2001年に茅葺き屋を設立、カヤツテクコミュニティは現在のカヤカル@落合に名前を変えました。そして新たに、カヤマルというイベントを始めます。2003年夏休み、美山町のきたむら茅葺き屋根工事（現：美山茅葺き株式会社）の現場にて第一回のカヤマルを開催。茅葺き屋主催による、茅を刈る「カヤカル」、茅葺きに赴く「カヤマル」、茅葺きが出向く「カヤコヤ」として、茅葺きという循環する生産システム全てを体験可能な態勢が確立しました。

2005年には、山城萱葺き屋根工事（現：山城萱葺き株式会社）と共催で宇治川河川敷ヨシ原でのカヤカ

ル05@宇治を開催。以降、山城萱葺きは宇治川で様々な団体とのヨシ刈りイベント共催を受け入れていきます。また、「カヤカル」は会場を淀川ヨシ原に移して伝統的なヨシ生産地でのヨシ刈り体験を現在まで継続しています。

活動の幅は年々広がっており、2006年には国営明石海峡公園神戸地区（あいな里山公園）での茅葺き民家移築工事にあたってカヤカル、カヤマルを開催、2008年には神戸市北区の八多ふれあいセンターに活用されている茅葺き民家の屋根葺き替えのため、地元協議会が行っている茅刈りに地元中学生が参加するにあたり、茅葺き屋にて茅刈りの指導と茅葺きについて講義しました。これらの取り組みは、それぞれ現在まで継続しています。こうした取り組みが、地元自治会の協力もあって、2009年「都市の遊休地を茅刈りで里山に」というカヤカル@落合の主旨に沿った神戸市北区役所主催「茅刈りイベント in 花山中尾台」の開催につながり、以降、2010年から始まる「神戸市茅葺き屋根とふれあう月間」の関連イベントとして現在まで継続しています。

神戸市では、茅葺きを巡って草原を利活用する取り組みが広がりを見せており、2008年には茅葺き屋で修行していた相良氏が、神戸市北区において「淡河茅葺き屋根保存会くさかんむり」を立ち上げ、茅刈りによる農村風景の再興を目指して取り組みを開始しました。くさかんむりは、六甲山で行われている「東お多福山ススキ草原再生プロジェクト」にも合流し、草地生態系の保全活動で刈り取るススキの需要として茅葺きを準備しています。



カヤネズミも戻ってきました

御崎馬の馬追いに参加して

(岩田光太：東京都在住)

先日、宮崎県串間市都井岬で開催された御崎馬の馬追いに参加してきました。第 12 回全国草原サミット・シンポジウムの開催予定地ということで注目されていると思いますので報告いたします。

<写真 1>

都井岬には半自然状態で馬達が放牧されていますが、年に少なくとも 1 回は 1 か所に集めて 1 頭ずつ健康診断（採血・駆虫等）を実施します。まずは、広大な牧野から、1 群ずつ柵で囲まれたところに追い込んでくる作業として馬追いが行われます。



<写真 2>

馬追いに参加しているメンバーは①牧野組合のメンバー（黄色の帽子）②宮崎大学獣医学部のメンバー③地域振興ボランティア団体のメンバー（オレンジ色の帽子）④草地学会のメンバー、他でした。



都井岬には小松ヶ丘と扇山という主に 2 つの放牧地があり、およそ 100 頭の馬達が暮らしております。まず、午前中に小松ヶ丘の馬達を、午後に扇山の馬

達をそれぞれの囲い場に追い込んでいきました。朝 9 時頃から始まり、夕方 16 時頃に 8 割弱の馬達を集めて終了となりました。

<写真 3>

馬追いは、総勢 100 名程度の人員が竹竿を携えて牧野に列をつくることで馬に移動を促すとともに進路を限定し、馬達を囲い場までじっくり追い込んでいきます。囲い場は山の裾に構築されているため、「(馬を)落とす」という表現が使われていました。1 群れ落とすと、再び尾根を登って次の群れを落とすという作業を繰り返していきます。



<写真 4>

ハーレムを形成している馬群が狭い箇所を集められた場合、馬達はどのくらいパニックに陥るのか、その馬群の中に人は入ることができるのかというのが筆者の最大の関心事でした。実際には、追い込まれた馬達は時々けんかをするものの、パニックを起



こさず、また人に対して噛んだり蹴ったりという悪癖は見られませんでした。組合員の方に伺うと、追い込まれてしまうと、馬は逃げ惑うのに精一杯で、噛んだり蹴ったりする余裕はなくなるとのことでした。

馬群飼育の技術が途絶えてしまった草原が多いと思いますが、筆者は都井岬における粗放的な馬群管理方法を抽象化・一般化し、他の草原にも普及させることができないかと思い考察を続けております。

草原をめぐる動き (2016年10月～2017年1月)

- 10/8 秋吉台お花畑プロジェクト1 (場所: 山口県美祢市秋吉台、連絡先: 秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局)
- 10/15 カヤ原を学ぼう! 第4弾「オギ原の生きもの探検～ごりごりの丘のカヤ原でカヤネズミの巣を見つけよう!～」(場所: 京都府立木津川運動公園 城陽五里五里の丘、連絡先: 全国カヤネズミ・ネットワーク)
- 10/15-17 第11回全国草原サミット・シンポジウム (場所: 兵庫県美方郡新温泉町、連絡先: 新温泉町役場 農林水産課)
- 10/22-23 茅刈り茅葺きワークショップ (場所: 長野県北安曇郡小谷村、連絡先: 日本茅葺き文化協会)
- 10/29-30 錦秋の茅場で茅刈り・ボッチづくり (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 10/29-30 私たちと一緒に白川郷で屋根葺きをしませんか? (場所: 岐阜県大野郡白川村、連絡先: 日本ナショナルトラスト)
- 11/12-13 茅ボッチ運びだしと山之口終い (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 11/13 第6回かやぶき祭り (場所: 岩手県一関市千厩町、連絡先: かやぶき民家を残す会)
- 11/19-20 茅刈り茅葺きワークショップ (場所: 福島県南会津郡下郷町大内宿、連絡先: 日本茅葺き文化協会)
- 11/19-20 茅刈り体験会 カヤマル 2016@美山砂木 (場所: 京都府南丹市美山町高野地区、連絡先: 茅葺屋)
- 11/23 集まれ、乙女高原草刈りボランティア「第17回乙女高原の草原を守る!」(場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 11/23 千町原 秋の草刈り「カヤを刈ろう」(場所: 広島県山県郡北広島町千町原、連絡先: NPO 法人西中国山地自然史研究会)
- 11/26-28 第5回茅葺きの里見学研修会「茅葺きの茶堂と伊予・祖谷の山村集落をめぐる」(場所: 愛媛県・高知県・徳島県、連絡先: 日本茅葺き文化協会)
- 12/3 乙女高原観察交流会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 12/4 第2回全国カヤ・サミット (場所: 滋賀県立琵琶湖博物館、連絡先: 全国カヤネズミ・ネットワーク)
- 1/29 乙女高原フォーラム (場所: 山梨県山梨市夢わーくやまなし、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- ※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 28 2016年10月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】第11回全国草原サミット・シンポジウムに参加されたみなさま、お疲れ様でした。所用により参加出来ませんでしたが、参加された方の感想、ニュースレターの報告などを拝見すると、大変な盛況が伝わってきました。内容が充実していたことも、参加報告から感じる事ができました。自治体ネットワーク、草原100選なども動き出しそうです。引き続き、ネットワークのみなさまのご協力をお願いいたします。